

【共催・協賛会議報告】



共催・協賛会議報告

◆ 文部省科学研究費 重点領域研究「人工現実感」公開シンポジウム報告

* 筑波地区

葛岡英明

(筑波大学構造工学系)

(News letter Vol.2, No.11)

平成9年10月15日、文部省科学研究費重点領域研究「人工現実感」の筑波地区公開シンポジウムが開催された。3時間のシンポジウムのうち、最初の1時間は研究概要説明、残りの2時間は岩田研究室と葛岡研究室のデモンストレーション見学とした。参加者の数は23名で、デモンストレーションを十分に見学、体験するにはちょうど良い程度であった。

ほとんどの見学者が十分にシステムを体験することができたため、システムの性能を試すための様々な入力を試みる見学者も少なくなかった。また、最初の概要説明の時間には質問がまったく出なかったが、デモンストレーションの間には、インフォーマルな雰囲気も手伝って、多くの質問が出された。拠点方式シンポジウムの利点は実際のシステムを見ることができるという点であることを実感した。

ただし、こういったデモンストレーションは効果的である反面、その準備に要する苦労は相当に大きい。以前から、このシンポジウムまでにシステムを完成させることを目標に作業を進めてきたが、日が進むに従い、とにかく、直前までシステムを開発し、できるだけ最新の状態を見て頂こうという欲が出てきてしまった。準備をする学生は、最後の数日間は徹夜に近い状態が続いたようである。

当日のシンポジウムの様子は

<http://www.kuzuoka-lab.esys.tsukuba.ac.jp/VRjuten/seika.html>
を御参照頂きたい。

* 東海地区

横井茂樹

(名古屋大学情報文化学部)

(News letter Vol.2, No.11)

このシンポジウムでは東海地区の(30代を中心とする)若手研究者に集まって頂き、VRについてのお互いの研究アプローチについて理解を深めるのを目的として開催されたものである。この地区の7人の研究者にVR関係の研究の現状を紹介して頂くとともに今後の展望について報告頂いた。

研究はVR対話ソフト、VR知識ベース、実空間と仮想空間の合成・対比、VRとテレロボティックスの関連など多様な話題でしかも先進的な研究事例が報告された。

しかし、研究相互に関連深い部分もあり、とくに、実空間と仮想空間の合成や対比、VRにおけるモデルの導入の重要性など共通の問題として理解が深まった。

参加者は名古屋大学の学生を中心として約40名であったが、内容の濃い講演が多く興味が高まったとの意見が多かった。これまで地理的に近くても面識がなかった研究者同士の交流の場ともなり有意義なシンポジウムであった。

* 九州地区

竹田 仰

(長崎総合科学大学)

(News letter Vol.2, No.11)

九州地区VR拠点シンポジウムは、重点領域の研究者を中心に、その他にも九州地区でVRを研究している研究者にも声をかけてシンポジウムを開催することにした。開催地は研究者や聴講する人々が参集しやすい福岡市に選定した。会場は、福田学園(東和大学)が有する研究会等の特別施設であるミネルバ会館を使用した。講演時間は午前10時から始め午後3時40分まで12件の発